

東吉野村

～移住を促進し村の活性化を図る～

奈良県の東部に位置する東吉野村は、森林と水源という豊かな自然に恵まれた、人口約 1,700 人の山村です。村は高齢化と人口減少に直面する中で、村外からの移住の促進や基幹産業振興等の施策により、地域課題の解決に挑んでいます。

以下では、村の活性化に向けた取組みについてご紹介します。

I 概要

1. 地理・歴史

奈良県の東部に位置し、三重県の県境に接している東吉野村は、人口 1,745 人、世帯数 830 世帯、面積 131.65 km² の山村である（総務省「国勢調査人口等基本集計」（2015 年））。

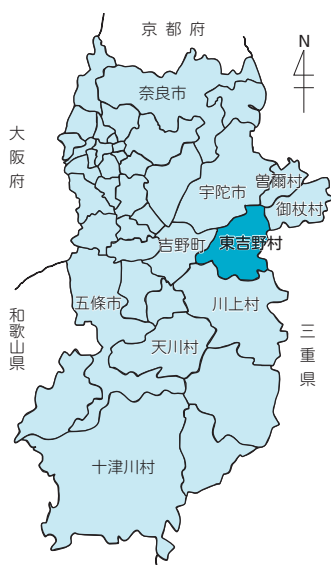
年平均気温は 13℃ 前後と涼しく、年間降水量は 1,800mm 程度と樹木の生育に適した環境のため、村の面積の約 96% を山林が占めており、和歌山に流れる紀の川（吉野川）の上流にあたる水源の村でもある。豊かな自然に恵まれながらも、村から最も近い近鉄榛原駅へは車で約 30 分（榛原駅から大阪上本町までは特急で約 40 分）と、都会にも意外と近い。

古くは神武天皇東征ゆかりの地として、丹生川上神社等にその事跡が偲ばれる。明治維新の魁^{さきがけ}となった天誅組の終焉の地としても知られ、今も志士の墓が残る。

また明治時代に日本最後のニホンオオカミが捕獲された地でもある。

昭和 33 年 3 月 1 日、旧小川村・四郷村・高見村の三村が合併し、現在の東吉野村を形成している。

東吉野村の位置図



2. 産業構造

「従業地による就業者人口（15 歳以上）」の産業別割合は、第 1 次産業が 12.1%、第 2 次産業が 31.6%、第 3 次産業が 56.3% と、奈良県全体（順に 3.4%、22.2%、74.4%）に比べ第 1 次産業・第 2 次産業の割合が高く、第 3 次産業が低い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による職業等集計」（2015 年））。

第 1 次産業の中でも林業経営体は 21 経営体（県内 15 位）と目立つが、村の基幹産業であったかつてほどの勢いは見られない（農林水産省「農林業センサス」（2015 年））。

民営事業所数は 161 か所（県内 39 市町村中 33 位）、従業者数は 639 人（同 33 位）である。産業分類別の従業者数を見ると、多い順に「総合工事業」（74 人）、「木材・木製品製造業（家具を除く）」（68 人）、「プラスチック製品製造業」（59 人）となっている（総務省「経済センサス—基礎調査」（2014 年））。

3. 人口構造

1960 年に 9,000 人を超えていた村の人口は、基幹産業であった林業の衰退とともに急速に減少を続け、近年では毎年 80 人前後の減少が続いている。平均年齢 61.6 歳、高齢化率（65 歳以上人口の割合）53.7% はともに県内 3 位と高い水準であり、高齢化が進行している（総務省「国勢調査人口等基本集計」（2015 年））。

Ⅱ 村の活性化に向けた取組み

こうした中、村では活性化に向けて「村外からの移住の促進」、「地域産業振興・安心して暮らせるまちづくり」、「観光・交流の促進」に取り組んでおり、以下に、それらの取組みを紹介する。

1. 村外からの移住の促進

○「クリエイティブビレッジ」構想

2014年、村は「クリエイティブビレッジ」構想を掲げ、創造的な仕事のできる人を村に積極的に受け入れることで、村内外の交流を促すことにより活性化を目指すこととした。

そのきっかけは、学生時代に同村への山村留学経験を持つデザイナーが、村に移住してきたこと。インターネット環境さえあればどこでも仕事ができるクリエイターを中心に、田舎暮らしを望む人が都会には多くいることがわかり、彼らを地域に受け入れるための環境整備が始まった。

「クリエイティブビレッジ」構想の根幹をなすのが、2015年3月に村が整備した「オフィスキャンプ東吉野」。これは、クリエイターが都会を離れ、村でも仕事を続けられることを体験してもらうための施設である（本誌2016年6月号「ビジネス情報」にて詳報）。

1日500円でWi-Fi環境を備えたシェアオフィスを利用できる他、カフェを併設。開設後3年間ですでに5,000人超が訪れている他、これまでに24か国もの旅行者の訪問を受けている。



「オフィスキャンプ東吉野」の全景（左）とシェアオフィス（下）



○移住希望者に対する相談窓口の整備

村では、移住希望者に対する一括相談窓口を早期に整備し、手厚いサポート体制を整えている。特徴的なのは、村外出身で同村に住むようになった「移住アドバイザー」を置き、様々な相談に当事者の立場からサポートを行っている点である。

アドバイザーは、移住に関する電話・メール等での問い合わせ対応はもちろん、希望者に対しては村内外を実際に回って案内するほか、最寄りの病院やスーパーの場所等の生活情報を伝えている。

移住者が実際に暮らす中で直面する問題についても、メンター（先輩）として様々な相談に応じ適切なアドバイスを行うことで、移住者が村に早く馴染めるよう工夫している。

一連の施策が功を奏し、2014年からの4年間で32世帯・65人もの移住が実現している。

○「村に住む」を体験できるゲストハウス

2018年7月には、民家を改装した移住体験施設として「ゲストハウス小川」が新たに誕生した。1泊2日2,000円とリーズナブルな価格で宿泊でき、東吉野村への移住希望者が村での生活を一時的に体験することのできる施設である。

これまで都会で暮らしてきた人が地方で暮らすには様々なハードルがあると考えられるが、まずは「ゲストハウス小川」への滞在を通じて移住のイメージを掴んでもらう考えである。



左上から時計回りに「ゲストハウス小川」の全景、リビング、和室

○村での住みよい環境づくりに向けた支援制度

村は「田舎暮らしエコ補助」として、山林に残る木を有効に利用するための「薪ストーブ設置費補助」制度、村内の空き家に住む際にトイレ、風呂、台所の水回りや居室等の改修に使える「東吉野村定住促進空き家改修事業補助金」等を用意した。これらは移住者や移住希望者との車座でのやり取りの中から生まれた制度である。

その他、村は子ども医療費助成制度や定期予防接種の助成、幼稚園児や小学校児童の預かり制度等を整備し、子育て世代にとって住みよい環境づくりに力を入れている。

2. 地域産業振興・安心して暮らせるまちづくり

○「小さな道の駅 ひよしのさとマルシェ」の整備

村は、2012年から柚子を奨励作物として、村内の希望者に苗を配布する等、新たな地域特産品による農家の生産意欲向上や耕地の有効活用等に取り組んでいる。

2017年12月、村の大動脈である国道166号線沿いの農産物処理加工施設をリニューアルし「小さな道の駅 ひよしのさと」がオープン。

柚子等の特産品の高付加価値化に向けて加工センターと、それらの加工品や村内で取れた新鮮な農産物、日常生活品の並ぶ「マルシェ」が整備されている。村内外の方が気軽に利用できる、村民のコミュニティの場となるだけでなく、農家所得の向上及び交流人口の増加を目指している。



「小さな道の駅 ひよしのさとマルシェ」

○小川地域のまちづくり

村は、中心地区である小川地域に賑わいを取り

戻すためのまちづくりに努めている。その中心的な存在として2017年5月に完成したのが、地域の賑わい拠点施設「かめやKAMEYA」である。

元々骨董品店だった建物と土地を所有者から寄付を受け、村がリノベーション。地元住民や有識者らで構成される「小川のまちづくり協議会」の活動拠点施設と、飲食店の開業を目指す人向けのチャレンジショップの2棟に生まれ変わった。

小川地区ではこのほか、前述の「オフィスキャンプ東吉野」での交流に加え、今後、元JA小川支所や旧役場庁舎の有効活用も予定されている。これらの施設が連携することで、地元住民と来訪者・移住希望者との更なる交流が生まれ、村全体の新たな賑わいづくりに繋がり、地域経済の発展・観光振興に寄与することが期待されている。



「かめや KAMEYA」は、「小川のまちづくり協議会」の活動拠点施設（左）とチャレンジショップ（下）の2棟から構成される。



○安心して暮らせるまちづくり

村は、安心して暮らせるまちづくりに向け、生活基盤整備と高齢者福祉充実に力を入れている。

台風や大雨等の災害に強いまちづくりに向けて治山・治水に取り組むとともに、道路整備や橋梁の長寿命化といった社会資本整備を進めるほか、2012年10月に運行を開始したコミュニティバス「ふるさと号」の利便性向上にも取り組む。

また、地域包括ケアシステムの充実を図るため、保健師を増員してコミュニティナースや介護支援専門員を配置。村民の健康づくりにむけ、保健・医療・介護・福祉の各機関が連携して高齢者の生活を地域で支えている。

3. 観光・交流の促進

○自然を活かした観光イベント開催

村は、明治時代に野生のニホンオオカミが最後に捕獲された地である。このことから、奈良を世界に発信する映画製作プロジェクト「NARative」作品として「東の狼」が村で撮影され、2016年のなら国際映画祭で上映されたことで話題となった（本誌2016年8月号「特集」にて詳報）。

この他、2017年8月には村とバス会社とがタイアップして「東吉野村トレイルランニング」を初開催。参加者は、夏でも涼しい標高1,000m超の自然林を約14km走破し、下山後は温泉や地元の食べ物を満喫した。同年9月には「投石の滝」ライトアップイベントを初開催し、光と音による幻想的な演出が行われた。村はこれら交流イベントを毎年開催し、魅力の発信に繋げる考えである。



ニホンオオカミの像



投石の滝ライトアップ

○歴史文化資源を活かした交流の促進

1863年に勃発した「天誅組の変」は、尊王攘夷派の志士らが新政府樹立を目指し、幕府の五條代官所を襲撃するも、政変により決起後わずか1日で逆賊とされ、最終的に東吉野の「鷲家口の戦い」で壊滅した事件である（本誌2013年12月号

「古道が紡ぐ物語」にて詳報）。

2013年、村は天誅組150周年を記念して「天誅組志士終焉の地」の石碑を村内に建立したほか、志士の出身地の一つ愛知県刈谷市と「ゆかりのまち友好市町村盟約」を締結。その縁で刈谷ハイウェイオアシスでの村の特産品販売に繋がった。

○上記のほか自治体等との連携

村は2016年7月、吉野町や川上村とともに、産業・雇用再生プロジェクト「目指せ！ふるさと吉野地域の復活！」に参画、林業振興や観光活性化による雇用創出に取り組むこととした。

また同年10月には、「東吉野村と奈良女子大学との協働連携に関する基本協定」を、翌年3月には「奈良県と東吉野村とのまちづくりに関する包括協定」を締結。前述した小川地域のまちづくりに、奈良女子大や県と協働して取り組んでいる。

このほか、村のホタルを贈ったことがきっかけで1986年に友好都市となった堺市とは、「東吉野村エコツアー炭焼き体験」等を通じて交流が続いており、都市住民の村への訪問に繋がっている。

豊かな自然に恵まれ、大阪から車で約1時間30分というロケーションは、村の大きな魅力の一つである。その強みを生かし、村は移住促進による地域課題解決に向けて取り組んでいる。

水本実^{みのる}村長は、「空き家バンクを最初に利用し家族で移住してきた若者にこの村を選んだ理由を聞くと『環境のよいところで子育てがしたい』と。このことで、これは村の中では気づかない視点。それから、移住者との車座で様々な支援を打ち出してきた」と語る。

まさにこうした移住者とのやり取りから、シェアオフィスやゲストハウス、各種支援制度が生まれ、移住者が新たな移住者を呼ぶ好循環に繋がっている。今後さらなる村の活性化に期待が高まる。

（太田宜志）